



「残されたごはんから思ったこと」

医薬経済社
坂口 直

先日、ファミレスで昼ごはんを食べたときのことだ。隣の中高年くらいの男性が食事を済ませ、席を立ったときに、お皿の上にごはんが半分ほど残っていた。今、流行りの糖質制限ダイエットだろうか。子どもの頃に、お茶碗に米1粒でも残っていようものなら、母親から「あんた、残っとるたい。農家の人ががんばって作ったとばい」と言われ続けてきた私は、必ず平らげることが習慣になり、それゆえ残ったごはんが、つい気になってしまう。

お昼を食べながら、年末の時節柄、業界のことをポーッと考えていたら、ふとジェネリック医薬品とごはんの境遇が重なった。薬価改定や原薬コスト増といった逆風下のなかで、安定供給のために設備投資や原薬調達に奔走している各社だが、お年寄りの家々では残薬の山がそびえる。医薬品とごはん、農家と製薬会社とは比較対象にならないことは百も承知している。ただ、ジェネリック医薬品を担当しつつ、ここ半年間は高齢者と薬の取材につきっきりだった自分にはそう感じた。

厚生労働省がまとめている「NDBオープンデータ」には、それぞれの医薬品について、各年齢層が1年間にどれほど処方されているか錠数ベースで記されている。その名の通り、オープンデータなので、ご覧になってもらえればわかるが、高齢者にはおびただしい数の医薬品が処方されている。まさにポリファーマシー問題を裏付けるような数字だ。取材のなかで、ある看護師さんが、「薬だけでおなかいっぱいになってしまいます」と言っていたのが印象に残っている。とある病院では、寝たきりの胃ろう患者にさえ、処方された10数の錠剤を手作業で砕き、シリンジで注入しているとも聞いた。

入院患者がそんな状況だと、通院している高齢者のお宅に残薬の山ができあがるのも無理はないと思った。ポリファーマシー問題の対策としては、薬剤師が医師の処方をチェックして、薬を減らそうという動きが各地で出始めている。診療報酬でも薬剤師の対人業務にインセンティブをつけようとしている。医薬品の適正使用の推進だが、裏を返せば、これは薬の需要が減ることを意味する。そう容易に状況は変わらないが、じわじわとビジネスにも影響してくると思う。さまざまな要因で、今後ますます利幅が小さくなっていく業界だが、各社がどのような経営方針で、令和の時代を生きていくか、見届けた



く思います。

ちなみに、私はあらかじめごはんの量を減らして、残さないようにしています。1年間で7～8キロほどやせました。生まれは長崎です。